

2026 年度第 1 回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから7ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書で、一点一画でいねいに書きなさい。
かいしょ
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

「主人公の「亮磨」は、つい最近偶然に知り合った視覚に障がいを持つ女性「さち」から近々開催されるフルマラソンの伴走を依頼されました。これに続く以下、文章を読んで、後の問に答えなさい。」

「さっきトラックで言ってたけど、1資格がないって、どういうこと？ いっしょに走るのに、資格も何もないでしょ？」

「あの……」迷っていた。ちゃんと真実をつたえなければならぬと決意したはずなのに、このa期に及んで話すのをためらっていた。

さちが、身をのりだすようにして、じつとこちらに顔を向けている。その目はたしかに、亮磨の視線とは交錯しない。どこか遠くにbショウテンが合っているような……。

目の前のジョギングコースにならんだ街灯が、いつせいに点灯した。十二月が近づいて、だいぶ日が短くなっている。亮磨が到着した数分前よりも、あたりはかなり薄暗くなっている。ついたり消えたりを短い間隔で繰り返した街灯は、すぐに安定して、黒いアスファルトの地面に穏やかな光の輪を落としていた。

とっさに口をついて出てきたのは、自分でも思いもよらなかった言葉だった。「俺、捕まったこと、あるんです。警察に」

さちの肩に力が入ったことがわかった。もしかしたら、思わぬ告白におびえているのかもしれない。目が見えないのだから、緊張するのはなおさらだ。それでも、

2

「人をだまして、老人から金をとろうとして、それで……」

さちが、膝の上で拳をにぎりしめる。

そうだ、これでいいんだと思った。

結果として、さちに嫌われればいい。となりを走りたくないと思わせれば、それでいい。ただその一心だった。

でも、そんな気持ちとは裏腹に、鼻の奥が、つーんと痛くなった。目のなかに涙がたまってくる。視界のなかで、街灯の光がにじんで、ぼやけた。

「きっかけは、すごく簡単なことでした」亮磨の意識は、高校三年生の五月にまでさかのぼっていた。

大宮駅の周辺を歩いていたら、中学時代の先輩に声をかけられた。同じバスケット部で、亮磨が一年生のとき、その黒崎という先輩が三年生だった。亮磨は、東京の私立高校に進学したので、まったくつながりはなくなっていた。

〔中略〕

連絡先を交換し、その日以来、何度か遊んだ。黒崎は見た目とは違って、口調も態度もやわらかかった。ヤバそうだったら、抜ければいいと単純に思っていた。

金がないときは、黒崎が貸してくれた。いつでもいいからと、気前よく一万円札を渡されたこともある。でも、それこそが黒崎の狙いだったんだと、あとになって気がついた。

ある日、ラインが来た。

「ちよつと、金があるんだけどさ、俺に借りてる三万、全部返せないかな？」

あくまで、向こうの物腰は優しくかった。脅されるようなことはないなかつた。今は厳しいとあやまると、すぐに返事が来た。

「じゃあさ金稼ぎたくね？ いい仕事があるんだけど。一気に返してお釣りがくるぜ」

とくに深く考えもせず、「わかりました」と返事した。たしか、その一週間後だったと記憶している。あのファミリータイプのワゴンが家の前につけられたのは。

乗りこむと、運転席に見知らぬ男がいた。黒崎と遊んでいたときも、見なかった顔だ。黒崎に言われるがまま、亮磨は車内で与えられたスーツに着替えさせられた。

「なんで、スーツなんですか？」

「いいから、早く着替えろ。失礼があっちゃいけないんだ」

曖昧な返事に不審はつのつた。けれど、それ以上追及することができなかった。車内の空気があまりにもピリピリしていたからだ。

大宮駅に向かう道すがら、車内で黒崎からひととおり説明を受けた。その内容を何度も反芻させられた。亮磨はもちろん、途中から気づいていた。ヤバイ仕事だとわかっていて。でも、交番に駆けこむことができなかった。

言われるがまま、ワゴンを降り、真っ直ぐ大宮駅に向かった。説明のとおり、待ち合わせ場所には老婆が立っていた。その手に、白い紙袋がにぎられていた。

「松野さんですか？」

「はい、そうです。あなたは？」

「山田の部下の高橋です。確実にシゲルさんにお届けしますのて」自分の声も、相手の声も震えていた。紙袋を差し出した老婆の視線が、亮磨から、べつの方向へすつと流れる。亮磨はその視線を追いかけた。

待ち合わせをよそおっていた男たちが、いつせいに躍りかかってくる。亮磨はとっさにその網をかくぐつて、東口方向へ逃げ出した。

が、実際に逃げられた時間は数秒くらいだったと思う。後ろから思いきりタックルをかまされ、地面に押し倒された。駅の床のタイルが頬にあたった。手錠は氷のように冷たかった。その瞬間、すべての未来が閉ざされた。今まで積み上げてきたものが、一気に崩壊した。

「ああ、終わったって思いました」亮磨はかろうじて、明るい口調をたもつてい

た。けれど、心のなかには暗い波が次々と押しよせてきた。さらわれて沖に流されないように、ただただ懸命に踏ん張って、真つ黒い感情の波をやり過ごそうとした。

さちの横顔をそつとうかがった。うつむきながら、じつと亮磨の話に耳を傾けている。頬がこわばっているようにも見える。そりゃ、そうだ。笑えねえ、こんな話。

「そもそもって、走馬灯も見えました。マジで」はは、と乾いた笑いがもれたけれど、まるで自分が発した声のように聞こえなかった。「両親の顔も見えました。妹の顔も見えました。だから、僕にとっては、**X**とおんなじだったってことなんだと思います」

さちが顔を上げた。何を言おうか迷っている様子で、一度口を開きかける。

「でも……」

下唇を噛んでから、さちはふたたびしぼり出すように言葉を継いだ。

「でもさ、何も知らなかったんでしょ、亮磨君は。だまされただけなんだから」「罪は、罪です。どんな言い訳をしても、それはくつがえらないんです。すぐに取調べがはじまって……」

逮捕されてはじめて、受け子という使い捨ての存在が、いちばんリスクの高い仕事をさせられることを知った。金の授受や、防犯カメラに映るATMの引き出しなど、最前線の仕事を与えられるということ。詐欺グループにとって、うまくいけば御の字だし、受け子が捕まっても切り捨てればいい。だからこそ、何も知らないふつうの人間が、受け子にしたてあげられるケースがある。

しかも、黒崎ですら、詐欺グループとは直接のかかわりはなかったのだ。リクルーターと呼ばれる、人材斡旋業者のようなブローカーとつながっていただけで、黒崎は受け子になりそうな**Y**をスカウトする役目にすぎなかった。

そのあとは、家庭裁判所につけられた。何も知らず、だまされただけということと、犯罪の前歴がないこと、すべての事情を話し、反省していることから、検察に逆送はされず、そのまま保護観察処分になった。

しかし、cダイショウはあまりに大きかった。学校は退学処分。地元では詐欺グループの一員という噂が広がり、白い目で見られる。家では腫れ物のように扱われる。ただ、飯を食って、あとは寝て過ごした。何をする気も起きなかった。

「で、厄介払いです。保護司の知り合いに、今働いている居酒屋の社長がいたんで、上京して一人暮らしをはじめました」

まばたきを繰り返していたら、目頭にたまっていた涙が自然と頬をつたっていった。さちにこの涙を見られないことが、せめてもの救いだった。涙をすすらないように、嗚咽をもらさないように、さちに気づかれないようにするので精いっぱいだった。

「本当にバカでした。現実にはガキの自分の考えがおよばないほど複雑で、それなのに背伸びをして、なんでもわかったふりをしつつけて」

これで、さちはきつと俺のことを嫌いになるだろう。亮磨は覚悟した。うつむいたまま、唇をぎゅつと噛みしめた。

「悪あがきするしかないんだよ……」

しかし、さちは言ったのだった。亮磨の手を探しだし、強くにぎりしめる。やわらかく、ほんのりと温かい手だった。

「結局ね、全部、悪あがきでしかないと思う」

感情を押し殺した低い声は、細かく震えているように聞こえた。亮磨は、はつと息をのんだ。

「私はね、走るの、好きなの。大好きなの。でもね、ときどき、思うんだ。ぐるぐる、走って、走って、トラックを走って、駒沢公園のジョギングコースを、何周も走って、それでも走って、でも、私はどこへたどりつくわけでもない。目が見えてたところに、戻れるわけじゃない」

まばたきを繰り返しながら、さちは目を伏せた。長いまつげが、ふさふさと動く。泣いているような、しかし、笑っているような、微妙な表情で話をつづける。

「ときどき、本当に、うんざりする。嫌になる。朝起きて、自分の目が見えないことを忘れて、あれ？ 見えないって、どうしようって、すごいパニックになることもある」

さちが、もう一方の手を重ねた。

「でもね、亮磨君、悪あがきしつづけるしかないんだよ、私たち」

さちの小さな両手も震えていた。こちらをはげまそうとしてくれているのと同じに、さち自身も何かにすがりつこうとしているかのようだった。

〔中略〕

「犯罪をしたからって、いっしょに走る資格がないなんて、思わないで」

さちは、ぽんぽんと、かるくたたいてから、亮磨の手を離した。

「私ね、来年の四月から、高校生をやり直そうと思ってる。盲学校に行くことに決めたんだ。二十一歳で、ピカピカの高校一年生」

そう言って、前を向く。

「このあいだ、見学させてもらったんだけど、盲学校って、目が見えない先生がいっぱいいるんだよ」

背筋をぴんと伸ばして、さちは胸を張った。

「だから、私も将来大学に入って、盲学校の先生になりたい。私も、走るよろこびを、見えない子たちに教えてあげたい。見えなくても、思いつきり走ることができるんだよって」

さちににぎりしめてもらった手に、まだほのかな温もりが残っている。さちの

体温が、やさしさが、冷え切った体と心にじんわりと浸透していくようだった。亮磨はさちに気づかれないように、そつと手の甲で涙をふいた。

「すごくいい夢だと思います。絶対、かなうと思います」

その一方で、こんなはずじゃなかったという焦りを感じていないわけではなかった。さちを倒したことを正直に話すつもりだったのに、完全にタイミングを失っていた。やっぱり、俺はいざというときに逃げ出してしまダメな人間なんだと痛感した。

けれど、もしかしたら、さちとともに走ることで臆病で怠惰な自分を変えられるかもしれない。さちを助けて走ることで、俺自身も救われるかもしれない。一縷の望みにするるように、亮磨はさちの力のこもった目を見つめた。

「私たち、いっしょの遠まわり組だよ。亮磨君も私より若いんだから、おそすぎるなんてことは絶対ないよ。勉強しなうして大学に入ることだってできるんだし」

さちが「よし！」と、小さくつぶやいて、立ち上がる。

「だからね、亮磨君」
か細い腕をおそろおそろの伸ばして、亮磨の肩をさぐる。そつと、手をかける。

「いっしょに走ろうよ、亮磨君。3意味のある、悪あがきをしよう！」

(朝倉宏景『風が吹いたり、花が散ったり』〔講談社〕より)

問1 二重傍線部aの読みをひらがなで答えなさい。また、b・cのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部1「資格がない」とありますが、「亮磨」が自分に「資格がない」と思っているのはなぜですか。次の「①」「②」にことばを入れて答えなさい。ただし、①には最もふさわしい文中のことばを書き抜いて入れること。また、②は漢字・かな交じりの二字を自分で考えて書きなさい。

自分は、「①」ことを「② 二字」ている卑劣な人間だから。

問3 2に入ることはとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つのるばかりの後悔と反省がいつのまにか保身の念に打ち勝っていた
イ さちと一緒に走らないですませるには威圧的にふるまうのがよいと思つて続けた

ウ これ以上さちを傷つけないためには自分を犠牲にするしかないと思つた

エ さちに真実を打ち明けないければ後悔するだろうと思つて踏ん張った
オ 勝手にほとぼりしてくる自虐的な感情と言葉をとめることができなかった

問4 X・Yに入る最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 無 イ 駒 ウ 君 エ 罪
オ 窓 カ 死 キ 嘘 ク 紙

問5 文中には、「さち」の言動によつて「亮磨」の考えが変わったことが分かる一続きの二文があります。それを探し、最初の六字を書き抜きなさい。

問6 傍線部3「意味のある、悪あがき」とありますが、これはどのようなことですか。次の空欄にそれぞれ十五字以上二十字以内のことばを入れて説明しなさい。ただし、次の二つの語を必ず用いること。

現実 未来

「十五字以上二十字以内」けれども、その中で、「十五字以上二十字以内」こと。

問7 本文の内容として正しいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 「亮磨」は、身内を心配してやって来た老人から金をだまし取ってしまった、申し訳ないと思つている。

イ 「さち」は、自分が置かれている逆境をいまでも完全には受け入れられていない。

ウ 「亮磨」は、苦しい心中を「さち」に察してもらうために、過去の告白を始めた。

エ 「さち」は、「亮磨」のほうが自分より苦しいことを次第に理解し始めている。

オ 「亮磨」は、「さち」と話をする中で自分の欠点をあらためて思い知った。

二次の文章は、アニメの制作を志す人に向けて書かれたものです。これを読んで、後の問に答えなさい。

1 映像の欠点

映像（動画）は、みなさん方が赤ちゃんの頃から知っているものですが、なんとなく知っていることと「認識されていること」「認識されるようにすること」というのは、本質的にちがうことです。

映像の本質を正しく認識するために知っておかなければならない最大の要件は、映像作品は観客を時間的に拘束する絶対的欠点をもっているということです。

この欠点は、動きがともなうために生じます。

絵画でも小説でも、時間の長短は観賞する側の自由ゆだねられています。演劇や舞踏、歌唱といった表現するための動きがあるものは、「動く時間」に拘束されています。その意味では、映像だけが特別ではないのですが、映画が発明されるまでの動きをともなった表現媒体は、絶対的にライブ（生）でした。

生の出演者と生の観客が同居する空間では、演技者、演奏者、歌手、踊り手たちは、観客といっしょに呼吸をしていましたので、観客の反応を感じとって、演技方や歌唱を変えることもできました。

それについて、映像作品は一方的に観客を時間的に拘束して、しかも、映像はその展開が演劇や舞踏以上に瞬間的に変化ができるために、観客は息をつめるようにして画面を見守らなければならぬのです。それで作品がつまらないもので、最後まで観なければならなかったら、観客にとっては地獄になります。

ですから、映像作品を制作するスタッフは、不特定多数の観客を縛ってしまう時間を「楽しく」「有意義に」に享受させる義務がある、という覚悟をもたなければなりません。

この映像がもつ「時間的拘束」という本質的な欠点をのりこえて、観客を楽しませるためには、映像の技法にも原則的な考え方が必要だと映画の先人たちは考えたのです。

それを厳守し、もうひとつ「物語の要素」を伝えるのが映像作品なのです。

〔中略〕

時間を取り越えるもの

立ち話や携帯電話でのお喋りは時間を忘れさせます。噂話もそうでしょう。そのような会話が嫌いだという人は特別なので、ここでは考えないことにします。

この立ち話、噂話が物語の根本です。

あまりにも単純すぎて疑問に思う方もいるでしょうが、このレベルの「お話」は思考を刺激するものでなく、「続けていられる」「おもしろさがあります。時間を気にすることのない」「お話」こそが、時間を取り越えられる要素といえるのです。

「物語」というものを考える場合、最低限立ち話でいどのおもしろさがあればいい、ということになるのですが、問題なのは、商品として不特定多数の観客におもしろがられる話、「作品として語られるべき物語とは何か」ということになります。

そうなりますと、立ち話とはちよつと違った要素が要求されます。

ですから、現場では、流行にのったものにしてしようという提案が出たりします。それでもいいでしょう。流行にのったものは、みんなが好きな普遍的な真理がふくまれているから。

2 「物語」と書きましたが、ストーリー、お話、筋書き、ドラマといった言葉で語られているものです。

「物語には永遠の真理がふくまれている」というような面倒な講釈は、別のテキストで勉強してください。

W、前述の理由から、観客の時間を拘束しても、観客に怒られないようにするためにこそ物語が必要である、と考えてみてはどうでしょうか。話している時間が経っていく、時間を忘れさせる、この機能を利用しないのはとても損なことです。

どんな素晴らしい発見や発明、どんなに素晴らしい物語の真理を聞かされても、観客にそのテーマについての関心がなければ、いくら真理を語られても眠気をもよおすだけです。

X、観客が関心を持っている人物が想像もしないようなことをやってくれ

たり、想像通りのことをやってくれる話というのは、喋っていても聞いていてもおもしろいものです。そうして、時間が経過していきます。

この原理を映像作品で忠実にやれば、ヒットすることになるのですが、これはとんでもなく難しい仕事なのです。

発表されたときは観客動員が凄かったりしても、ちよつと時間が経つと忘れられてしまう作品は珍しくありません。この場合は「役者が良かった」とか「時代に合っている」「ヒットしているものに乗ったもの」「格好良かった×××」といわれ評論されても、物語そのものについて触れられることはまずありません。

たしように上等な評論としては、役者の芝居が良かった、とか、監督術や脚本の狙い目が時代にあっていた、説得力がある、といったことが専門誌で評価されたりしますが、そこまでのことで、動員につながることはなかったりします。

Y、作品として良かった、といわれることはないものです。

Z、後年になって評価される作品というものもありますが、それは、優れた作家性が見直されることであって、単純に「おもしろかったね」という評価とはちがいます。

映像作品で、わたしたち観客がなにを覚えているかといえば、それぞれに関心のある事項が「羅列」されていることでしょう。が、その「羅列されたものを楽しめ」「共感し」、さらに、それに「癒されるか論される」か「感動する要素」があれば、絶対的に記憶として刷り込まれます。

その「刷り込む」ための3装置が物語なのです。

ですから、「物語」が大切なのです。

物語るには時間がある

物語を語ることは「過程を語る」ことです。過程にはどうしても時間が必要になり、語るべきものには、時間とともに発展性があるから、おもしろさを創出できると断言できます。

観客はこの「発展性」おもしろさ」を要求します。「変化」と理解してもいいでしょう。そのため、昔から成長物語が好まれているというのは、短絡的かも知れませんが、まちがいでないのです。

具体的な物語がなくてもいい、映像で心象風景を描いたものや心理描写を尊重したものもいい、哲学的な真理を語らないでどうする、時代を痛撃するものでなければならぬ、革命を……と若いときには考えてしまうものです。

挑戦はおおいに結構なのですが、そのような作品で名作といわれているものは少ないという事実だけは、忘れないでください。

短編でも、具体的な物語で寓意（ある意味性）を感じられるものがなければなりません。しかし、4これが長編より難しい仕事になるのは、一口で物語ることができて、記憶にのこる物語の構築というものは、よほど強力なものでなければならぬからです。

しかし、「強力なテーマを一口に語る」ということは、矛盾をふくんでいる命題ですから、よほど端的なメッセージと物語の切り口を発見しなければなりません。ですから、ひとつの完成した語り口を獲得するのは、短い作品であればあるほど、難しいものになります。

そのうえで、

物語る過程（プロセス）Ⅱ5語り口を発揮したもの（スタイルの発見）

これがなければ観客は見てくれませんから、「物語るものがあり、語り口を発見できなければ、映像作品を創ってはならない」といえるのです。

〔中略〕

さて、映像媒体では、どのような種類のものであれ、絵画とは違って鑑賞する時間を強制するものですから、「物語」によって時間を克服する必要性が強くなります。

そして、物語るというストーリーテリング（語り口）そのものに、時間とともに発展するおもしろさがなければなりません。

ディテール（細部）がおもしろいということはよくいわれますが、それは本来の作品的評価の対象にはならないものと知るべきです。

たとえば発展性のないワンカットの画面を10分間流しっ放しにするのは、ただの観察行為でしかなく、銀行やコンビニの監視カメラの映像とおなじ機能しか示していないことになります。

すなわち、絵画や写真、彫刻などには、集中した表現がなされ、映像では、積

み重ねが必要な、より具体的な物語の過程を表現できるのでから、その機能を理解して利用しなければならぬ、と説明することもできます。

このような例からも「映像にも語り口がある」と想像してください。

(富野由悠季『映像の原則 改訂2版 ビギナーからプロまでのコンテ主義』(キネマ旬報社)より)

問1 傍線部1「映像の欠点」とは何ですか。次の文の空欄に合うよう、二十
五字以上三十字以内で説明しなさい。

映像が「二十五字以上三十字以内」点。

問2 傍線部2「物語」とありますが、これを映像が必要とするのはなぜ
ですか。その答えを二点、次の文の空欄に合うように、傍線部2以降の文中
からそれぞれ書き抜きなさい。

物語が、観客に「八字」から。

物語によって、映像が観客に「十字」るから。

問3 WからZに入る最もふさわしいことばの組み合わせを次の
中から選び、記号で答えなさい。

ア	W	ぎやくに	X	まして	Y	むろん	Z	さて
イ	W	さて	X	むろん	Y	ぎやくに	Z	まして
ウ	W	むろん	X	まして	Y	さて	Z	ぎやくに
エ	W	ぎやくに	X	さて	Y	むろん	Z	まして
オ	W	さて	X	ぎやくに	Y	まして	Z	むろん

問4 傍線部3「装置」の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、
記号で答えなさい。

ア 観客を感動させる事項が、できるかぎり加工されず素材そのままに提示
されている必要がある。

イ 観客の興味をひく内容が並べられ、さらにその内容や語り口などに発展
性がともなっている必要がある。

ウ 観客にとって関心のある内容が多く含まれ、その語り口も観客の関心に
合わせている必要がある。

エ 観客を飽きさせない事項が羅列され、同時に内容の全体像が次第に明ら
かとなる構成をとる必要がある。

オ 観客を感心させる内容となっていないなくても、その内容と語り口に変化が
含まれている必要がある。

問5 傍線部4「これが長編より難しい仕事になる」とありますが、その理由
としてあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強力なテーマは、それなりに物語の長さがあったほうが語りやすいから。
イ 物語は、観客の意表を突くような切り口で語れることを命題としているか
ら。

ウ 作品が短いことで、そこに込められるテーマの数と種類が限られるから。
エ 読むのかかる時間が短いと、読者の記憶にメッセージが残りづらいか
ら。

オ 短編だと抽象度が高くなり、観客の理解が追い付かなくなるから。

問6 傍線部5「語り口を発揮した」とありますが、それとは逆に、「語り口
を発揮」しないことは何と表現されていますか。文中から七字で書き抜きな
さい。

「以下余白」

